
悠久のフォルトーナ

kazaisyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久のフォルトウーナ

【Nコード】

N3702Y

【作者名】

kazaisyu

【あらすじ】

気がつけば、俺は花畑の只中にいた。

目を覚ましたとき、カナメがいたのはVRMMO オーリオウル・オンラインの中だった。自らがプレイヤーだったはずの……見慣れているはずの世界。しかし、どこか違う？ これは……本当にゲームなのか？

ゲームオーバー＝死。脱出不可能な、完成された世界の中で、少年は何を残すのか……。

ズウン、という音とともに、巨人の頭が地面に落下した。

天をも衝くようだった威容だった、その鋼鉄の巨人は、今や地面に片膝をつき……そして、登頂から順番に、頭から肩へ、剥がれ落ちるように崩れていく。

そして 数秒後。その全てが瓦解するように、大地へと崩れ落ち、天高く砂埃が舞い上がるのと、まったく同時。

俺達の頭上で、高らかにファンファーレが鳴り響いて。

「やつ……」

巨人の足元に居た俺は、砂埃を被りながら……しかし、高らかに武器を掲げて 気がつけば、俺は叫んでいた。

「やつ……た、ぞ ツ……!!」

うおおおおおっ!! という歓声と同時に。

二年間の永きにも及んで誰も攻略しえなかった、難攻不落のスラंकユニークモンスター……「ギガス」は、ついに、俺達の手で討伐された。

空に浮かぶ、白く、そして薄く濁る円環が、俺達の勝利を見下ろしている。

オーリオウル……円環に見降ろされた世界、フォルトウーナ。その片隅で、俺たちは今日、記念すべき一日を刻んだ。

これは、俺にとって、何よりも輝かしい記憶。

決して失いたくないと願う、あの冬の日の記憶……。

「やったなあ、カナメ……」

がつんつ、と肩を組まれると同時にジョッキをぶつけられ、俺は

わずかによろめいた。

見ればそれは、この店 『風見鶏亭』の店主である。NPCに任せておけばいいものを、自分で創業したこの店を、わざわざ自分で切り盛りする偏屈者だ。

そこまで強くぶつかられたわけでもないのによろめいて、「こりや酔ってるな……」と少し自覚。とはいえ、ぶつけられた方の顔も真つ赤であり、似たようなレベルであるから問題ない。

ぶつけられたジョッキには、当然ながらみなみとエールが注がれており、それは相手の方も同じだ。

無論、この世界……即ち、一没入型ネットゲーム（VRMMORPG）において、酒を飲んだところで本当に酔っぱらうわけではなく、その酩酊感は、あくまでシステムの作り上げた幻覚でしかない。……のだが、まあそんなことは些細な問題である。

気がつけば周囲も、割と惨状である。酒に弱いらしい面々は早々に酔い潰れて眠ってしまったているし、人によってはなぜか性格すら変わり、説教すら始めている者もいる。

（リンの奴……ストレス溜まってんのか？ ライも可哀想に……）
説教する側を心配し、される側を憐れみはするが、まあ助けるつもりは毛頭ない。せつかくのこういう席だ、思い思いに吞めばそれでいい。

今日は、このVRMMO…… オーリオウル・オンライン にて、初めてSランクのユニークモンスターが討伐された日である。

ユニークモンスターというのは、いわゆるボスのようなものであり、時にダンジョンの奥深く、時に偏狭なフィールドに出現する強敵だ。

モンスターランクは雑魚であれ何であれE〜Sに分けられ、Sというのは最高ランク、そのユニークともなれば……要するに、このゲーム最強の一角を占めるモンスターと言っても、相違ないだろう。

ネットゲームが往々にしてそうであるように、このゲームにはエ
ンディングと呼べるものは存在しない。あるのはただ、茫漠とした
広大な世界である。ストーリーは、一人一人、プレイヤー自身が創
り上げていく。それは要するに、人生と同じものだ。

しかしこの オーリオウル・オンライン の茫漠さたるや、まさ
に筆舌に尽くしがたい。

そも、最強と呼ばれるSランクのユニークモンスターが討伐され
るのに、およそ二年という長い年月を有したのだ。

まあどれだけ強かろうが、何百人単位でプレイヤーが押しかけれ
ば倒せるのだろうが……そこは生憎、ユニークモンスターは、戦闘
人数が十人を越えるとどこぞへ消えてしまうのだ。

まあともあれ、今日この店は、Sランクユニークモンスターを倒
した、十人から成るパーティ……つまりギルド ―銀楯の聖槍（S
E・L） による貸切だった。

とはいえ、俺はギルドの一員ではないのだが……まあ、それこそ
些細な問題という奴だろう。

「しかしよお……ぐっ……。感慨深いぜ……」

「あ？」

肩を組んだままの店主が、ぐっと袖で目元をぬぐう。

「だってよお、俺はお前らがヒラのピラピラギルドの時から面倒見
てやってるからよお……」

「どこの設定だそりゃ……」

半眼で告げ、溜め息を吐く。

この店主とは、非常に長い付き合いだ。正確には、俺がこの店に
通い出して、気がつけばギルドの面々も行きつけになった、という
ところだろうか。

実際この店は、この街、交易都市カリスで指折りの店だと思う。
大通りから離れているという立地条件の悪ささえ除けば、雰囲気は

いいし、飯もうまい。とはいえそれを褒めると、この男は調子に乗るので黙っておくが。

しかし、交易都市カリスをホームとするギルド、――銀楯の聖槍（S・E・L）がここに通い出したのは、むしろ彼らがトップギルドに数えられるようになってからだ。

「まったく、無茶苦茶言ってる……」

「……でも、感慨深いのは同感」

俺の溜め息混じりの言葉に、かぶさるように聞こえた声は、ひどく聞きなじみのするものだった。

「シノブ姉？」

振り返れば、そこにはアイスグリーンの髪の少女が、じっとこちらを見ていた。

その表情は無表情である。しかし、長年を共に過ごした経験から、それだけではないこともよく知っていた。もともと現実世界ならばともかく、それがアバターである以上、簡単に読みとることなど出来はしないが……。

「……私は、カナメのおかげだと思ってる」

はつきりと告げられた言葉に……しかし、俺は小さく笑った。

「そんなことないよ、シノブ姉。だって、俺をここに……このオリオウルに誘ってくれたのは、シノブ姉の方じゃないか」

シノブ。そのアバター名は、しかし彼女の本名でもある。

蓮宮忍。彼女は自分にとって、隣に住む古くからの幼馴染であり、そして自分……何の取り柄もない平凡な男、千条要を、この世界に連れてきた張本人でもあるのだ。

それゆえに、シノブ姉。

その呼び名は、現実でもこちらでも変わらない。そして俺のアバター名『カナメ』も、本名と同じだから、この二人の間だけは呼び方がそのままだ。

……まあ、俺のAvatar名が本名と一緒になのは、シノブ姉に半ば無理矢理そうされたんだけど……。なんでも「要の名前、好きだから」とかそんな理由で……。

少し微笑んで、俺は言葉を続けた。

「それにさ。俺なんて、所詮は前でガンガン当たって碎けるしかないだけのアタッカーで……。それこそ、シノブ姉のヘイト管理がなかったら、すぐに死んじまうくらいひ弱でさ」

「……そんなことない。カナメのアタッカーとしての攻撃力は、私は凄いのと思う」

「それは、私も同感だな」

ふと、唐突に割りこんできたのは、例の、説教を繰り返していた黒髪の女性だった。

「隣で戦っていても思うが、カナメのあの精神力は凄いよ。どんなに強烈な攻撃でも、ギリギリで避けて反撃するんだ。普通なら、もっと怖がって距離を取るはずなのにな」

「いや、正直、リンが背中を守ってくれるおかげだと思ってるんだけど、俺は」

そう言って苦笑する。リン、と呼ばれた、黒髪をポニーテールにまとめた少女は、「そうか」と言って顔をやや赤く染めた。

「それに、一銀楯の聖槍（S・E・L）の一員じゃないはずの俺が、このパーティに参加させてもらえたのも、懐の広いマスターさんのおかげだしな」

彼女　リンは、ギルド　一銀楯の聖槍（S・E・L）のギルドマスターを務めている。……というよりもむしろ、リンのカリスマ性にあやかっただけで結成された、とも言っている。

リンというプレイヤーは、容姿、実力、性格ともに、オーリオウル・オンライン　数十万人のトップに位置している。

Sランクユニークモンスターの討伐パーティにとって、彼女ほどおあつらえ向きな人間もいないだろう。事実、作戦や準備から何まで、彼女はパーティリーダーとして、その手腕を遺憾なく発揮していた。

対する俺は、コミュニケーション自体は苦手ではないのだが、ギルドが苦手なこともあり、ずっとソロ　まあシノブ姉がいるからペアか　プレイを貰っていた。いわゆる一匹オオカミ気取りか。そんな俺に、「一緒にパーティを組まないか」と初めて声をかけてくれたのが彼女だった。

シノブ姉の意向もあって、再三のギルドへの加入要請を断り続けている俺を、しかしそれでも気分を害することなく、ずっと誘い続けてきてくれた。

「その点、俺は感謝してるんだ」

彼女のような存在がいなければ、当然、今日のような感動的な場面に遭遇することなどありえなかっただろうから。

リンは、カナメの言葉に、「そうか」と少し嬉しそうに微笑んだ。その頬は、やや朱に染まったままだ。

「あれ〜、リーダー、もしかして照れちゃってるう〜?」

横から、聞き覚えのある声で囁きたててきたのは、ピンク色の髪をした少女だ。にやにや〜、という効果音が聞こえてきそうな、そんな笑みを浮かべている。

ぎぎぎぎ、という効果音を立てて、リンがひきつったような笑顔で振り向いた。

「ユ〜リ〜?　何か言ったあ〜?」

「あ、ごめんなさいリン、ちよつ、待って、私何も言ってな　」

「問答無用　っ!」

ずどがががつどんがらがっしゃーん　!

と、まあ効果音にすればこんな感じだろう。鬼と悪魔が追いかけてくるを始め、周囲からは「やれやれー」とはやし立てる声が聞こえてくる。

それに小さくため息を吐いて、再び視線を戻す……と、今度は姉が膨れていた。

「シノブ姉え？」

「……私は、弟が人気者で心配」

はい？ とわけが分からずに問い返す。しかし、それに答えたのは、横合いからの笑い声だった。

「ははは……確かに。カナメさんはモテモテですね。同性としては羨ましい限りです」

爽やかな声に振り向けば、そこには、金髪碧眼の細面の少年が、いつの間にやら腰かけていた。

「ライ。お前、さっきまであっちにいなかったっけ？」

というかむしろ、あっちで説教されていた気がする。

「ええ、何やら不穏な予感がしたので、こっちに避難してきたんです」

カナメの疑問にあっさりと断言され、「あ、そう」と肩を竦めつつ返す。

この細面の少年、ライ、ことライリツヒは、銀楯の聖槍（S・E・L）のサブリーダーである。そして、自分にとっては数少ない、親友と呼べる少年だ。

ちなみに、コイツが敬語なのはデフォルトだ。目上とか目下とかそういう類のものではない。誰に対しても丁寧な物腰で接する、まあそういうスタンスなわけだ。

「しかしお前も大変だよな」

「何がです？」

エールを口に運びつつ、ライが首を傾げる。それに、くい、と親指で背後　魔力障壁を挟んで睨みあいを続ける鬼と悪魔　を指差した。

「あの連中のセーブ役とか。俺には無理すぎる」

「はは、そりゃ僕にも無理です」

要約すれば「早く止めてこいよあれ」という意味だったのだが、即答で返されて、再び「あ、そう」と返すほかになく　ぐびり、ともう一度エールを喉に注ぎこんだ。

「そういえば、さっきの話なんですけど」

「さっき？」

「カナメさんは凄い、っていう話です」

にこり、とライはその細面で微笑むと。

「　正直、僕も……あの　ギガス　を倒せたのは、僕はカナメさんのおかげだと思ってます」

至って真面目に、そして優しい声で。はっきりとそう断言されて……しかし、これに「あ、そう」などと返すわけにもいかない。

ぼりぼりと頬を掻いて、エールを煽りながら言葉を返す。

「何言つてんだ。お前のヒールがなきゃ、俺は早々に死んでたよ」

ライは　一銀楯の聖槍（S・E・L）　のサブリーダーであると同時に、優秀なヒーラーでもある。

雑魚戦ならばともかく、正直、ああいう大規模なユニーク戦では、あまりこいつ以外にヒール役を任せたくはない。

それほどまでに優秀かつ冷静、そして常に大局を見れる大物なのだ。

少なくとも俺はそう思っているし、同じ意見の人間はそれこそゴマンというはずであり……。

「カナメさんは、自分を過小評価しすぎなんですよ」

優しくも、しかし少しだけ嗜めるような色を混ぜて、ライは微笑んだ。

「あれだけ敵に張り付いて、あれだけの効率で攻撃を叩きこめるダメージディーラーを、僕は他に知りません。リーダーも僕も、ギルドのみんなだつてそう思つてますよ」

……確かにそりゃ、アタッカーとしての自信はそれなりにあるけれども。

だが、それは過大評価つて奴じゃないのか、などと思ひながら……しかし、口から衝いて出たのは、まったく違う種類の言葉だつた。

「この十人のパーティ……誰が欠けたつて、勝てなかったさ」

ああ臭い……と、言つてから少しの後悔。

だけれども、悪い気はしなかった。きつと、それは掛け値なしの、酒が入っていたからの本音だつたから。

ライは、少し驚いたような顔をして……そして、ふっと微笑んだ。

「……そうですね」

カンツ、とお互いのジョッキを合わせる。

今日の日を祝つて。

そして、これからに幸あれと。

……かくして、オーリオウル・オンラインの、フォルトウーナ大陸の片隅で。

賑やかで、しかし幸せな、宴会の夜は更けていった。

昨日の記憶が、正直言ってあんまりない。

呑んで騒いで歌って、最後には全員が酔い潰れたことまでは覚えてはいるが、そこから先はまったく記憶にない。

ましてや目が醒めれば、なぜか シルヴァリー・エスク・ロンギヌス 銀楯の聖槍 のギルド

ホームのリビングで寝転がっていたとか……もはや意味不明すぎる。寝るならなぜ、自分の泊まっている宿屋じゃないのか。みんなはどうしたんだろう。つーか根本的に俺どうすりゃいいんだ、などという考えがぐるぐると渦を巻き、ソファアに座ってうんうんと唸っていた。

貿易都市カリスの片隅に存在するこのギルドホームは、非常に広大な面積を有している。

曰くなんでも、ギルドホームというやつは、ギルドランクに応じて増築されるらしい。であるなら、一体S・E・Lはどれほどのレベルなんだろう……。そう思わせるほどのデカさ、そして豪華さだ。白亜の宮殿を思い起こさせるような、そんな美しさ。しかしその一方で、いやらしさを感じさせないような、どこかシックな雰囲気。(落ち付くな……)

そう思いながら、ソファアに体重をかけると、ぎしりと軋んだ音を立てた。

「つーか今何時だ……」

この オーリオウル・オンライン は、たとえ内部で熟睡しても自動的にログアウトはしない。

しかし、自動的なログアウト、というものが存在しないわけではない。

ひとつは、外界……すなわち現実世界の肉体が、何らかの刺激を受けた時だ。肩を叩かれたり、頬をつねられたり、あるいは音を聞いただけでログアウトしてしまう。まあこのあたりの設定は自分で弄られるわけだが。

もうひとつは、二十四時間が経過すること、だ。

機械の構造上、二十四時間以上の連続使用は不可能になっており、たとえどのようなプログラムであっても、二十四時間以上プレイヤーを拘束することは不可能である。

これはハードウェアの問題であるので、VR機器を改造しない限り、二十四時間以上のログインは不可能であるのだ。

まあもつとも、たとえ一分でもログアウトすれば、再度ログインできるのだが。

右手の指を揃えて、内側に引く。ユーザーインターフェースを出現させるコマンドだ。すると、わずかな音を立てて、水色のインターフェースが視界右側に出現した。

ステータスやアイテム、クラスやスキルといった項目が並び、最下部。時間は

(げ、朝の十一時……)

寝すぎだろ、俺。

基本的にゲーム内時間は日本時間と同期しているので、こちら側も昼ということになる。

もしかして俺は、朝から昼までずっと、このリビングを占領し続けていたわけなのか……。

申し訳なさと、同時に「じゃあギルドに入ろう」とか迫られそうな予感がして、若干ブルーになっていたのだが……。

そのとき、ギィ、という扉の開く音が聞こえて、はっと顔をあげた。その扉の向こうから姿を現したのは……鶯色の髪の少女。

「……なんだ、シノブ姉えか」

「……なんだとはなんだ」

顔を出した当人はぷくり、と少しだけ頬を膨らませてから、ぱたぱたとこちらに駆け寄って来る。

「……どう？　ちゃんと起きてる？　頭痛くない？」

「ああ、大丈夫」

というよりも痛いわけがない。ゲームの作りだした仮想の酒に、二日酔いなどというものが存在するはずもないのだ。

「そういえば、他の連中は？」

「リンとユーリさんは落ちてシャワー浴びるって。ライ君は買い出し。ミミは下で武具の補修。他の人たちはもう落ちた」

「……なる」

他の人たち、というのは、前者と自分たち五人以外の、昨日のパイティメンバーのことだろう。S・E・Lのメンバーであり、自分にとっても得難い友人だ。が、実のところシノブ姉はその名前すらも覚えていないのだろう。

この人に、団体行動は無理なのだ。天性の引きこもりにしてニート。人の名前を覚えるのは大の苦手。コミュニケーション能力は自分よりもさらに皆無だ。むしろ、リズやライたちの名前を覚えているだけでも奇蹟に違いない。

まあもつとも、それで不快というわけではない。この人は、自分が認めた人には誰よりも優しく接するのを知っているから。

シノブ姉の言葉に頷いて、「よっ」とソファから立ち上がる。

「どうする？」

「俺ももう24だし、ミミさんに武器預けて、一風呂浴びてくる」
そう、とシノブ姉が頷き、そして同時にぴたりと傍によってくる。そして必殺の上目遣い。毎回思うのだが、この人分かってやっているんじゃないのか。

そんなことをつらつらと考えるカナメに届いてきたのは、一言。

「……ごはん」

「作りに来いと?」

「イエス」

ですよねー、と頷いて、分かったとばかりに肩をすくめる。「待ってる」と言うシノブ姉を置き去りに、リビングから出て、そして地下への階段に。

地下への螺旋階段を降り始めると、カン、カン、という音が木霊するように耳へと届いてきた。

地下は、S・E・Lに所属する、専属の鍛冶師のために用意された空間なのだ。とはいってもそう広いわけではないが、鍛冶のための設備は一通り整っている。

螺旋階段を降り、石造りの門を潜る。

むわっとした熱気に、思わず息を吐いて体温を調節。もともと、その奥で金槌を振り下ろし続ける人物に、声をかけることはしない。作業中に声をかけるのは、明確なマナー違反だからだ。

一言で言えば、小柄な人物であった。

正直言って、片手に持つハンマーが非常に不釣り合いそのものだ。くりくりした瞳、流れる金髪、華奢な腕、どこからどう見てもただの少女。それが、この熱気の中で汗を垂らしながら、一心不乱に金槌を叩き下ろし続けているのだ。

鍛冶、というのは、生産系クラス 鍛冶師 のみに許される特別スキルである。

といっても、実のところ、多くの鍛冶師は他のクラスの片手間程度のものでしかない。

ある程度、自由にクラスの付け替えが可能なこの オーリオウル・オンライン では、戦士をやりながら一時だけ鍛冶師、というようなプレイスタイルが可能なのだ。

しかし、このような大規模な鍛冶設備を使えるだけの高レベルの鍛冶師は、サーバー内に百人もいるかどうか、というレベルだ。

数十万のプレイヤー人口に比して極端に少ないその理由は、はっきり言ってしまうえば、育てるのが大変すぎるからだ。

そもそも、鍛冶師のスキルは戦闘にまったく必要ない。それでいて、大規模な鍛冶が行えるまで育てるには、非常に膨大な経験値が必要となる。

しかし一方で、鍛冶師というのは、モンスタードロップしない特殊な武器をその手で製造し、時に折れた剣をすら修復出来る貴重な人材である。もともと材料費が馬鹿にならないので、稼ぎになるわけではないのだが。

そういった意味で、S・E・Lのような専属の鍛冶師を持つギルドは、まさしくほんの一握りなのだ。

アイテムインベントリを操作して、昨日のうちに外しておいた装備関係を足元に出現させる。

修理してほしい武器はその辺においておけ、というわけだ。実際、他のキャラクターのものであるう装備が、その辺に転がっている。不用心と思われるかもしれないが、実際、ギルドの内部で盗難が起こるなどありえない。それほどの信頼関係を、このギルドは築いていた。

さて、それじゃあいくか　と踵を返しかけたそのとき。

カン、という一打ちとと共に、部屋の中に眩い閃光が走った。おっ、と振り向く。それはすなわち、作業が完了した証明だ。

鍛冶、といっても、これといった特別な作業は存在しない。

基本的に、素材を叩いて武器を作り、研ぎ石に掛けて剣を研ぎ、そして折れた剣を叩いて修復する。そしてその作業が終わったとき、武器が光り輝くのである。

しばらくして光が収まると、少女の手には、一本の美しい剣が出

来上がっていた。

「御苦労さま、ミニさん」

ふう、と額の汗をぬぐう少女に一声かけると、はうあつ、と飛び上がるように反応した。剣を落としかけるところを危うくキャッチし、もう一度ふう、と額を拭う。

ミニ、と呼ばれた少女は剣を鍛冶台において立ち上がると、こちらへと振り向いた。

「もうっ、いつからいたんですか、カナメさん？」

「ん？ いや、ちよつと前からだけど……」

「声ぐらい掛けてくださいよう、びっくりしちゃいました」

ぶくり、と頬を膨らませてそっぽを向く。こう言っでは怒られそうだが、なんというか、実にカワイイ。小動物的な意味で。

ミニさん、と呼ばれたこの女性は、ギルドS・E・Lの専属鍛冶師だ。

そのかわいらしい見た目とは裏腹に腕は一流で、専属鍛冶師でありながら、割と依頼が殺到したりもする。

時折、リンからゴーサインが出て、外からの依頼もこなすわけだが……実際のところ、その理由の大半は、むしろ彼女自身に由来している気がする。

背は低く、しかし美しい金の髪と白い肌が、まるで妖精のような雰囲気彼女に与えていた。それでいてこの性格なのだから、ファンがつかないことはありえない。

ちなみに、自分とはこの専属鍛冶師になる前からの付き合いで、その延長線上で、未だに武器を鍛えてもらったりもする。

「ごめんごめん。作業に集中してたみたいだから。……ところでそれは？」

「あ、はい」

苦笑しつつも問うと、ミミは手元にあつた剣を掲げた。
黄昏色の刃と、美しい装飾。太陽の日差しを浴びれば、さぞ美しいだろうと思える意匠。

「……アーベントルーラーか」

アーベントルーラー
暁の守護者、という名前を冠した片手剣だ。鍛冶師、つまりミミによつて作られた品で、それゆえに世界に一本しか存在しない。

「はい。リンさんに頼まれてたので」

「そっぴや、折れたんだよな、確か」

例のギガスとの戦いの後半、脛へ斬撃を加えると共に折れてしまったのだ。あの時はまったく表情を変えずに、剣を予備に交換して戦闘を継続していたが、あの剣を愛用していたリンはさぞ悔しかったことだろう。

ええ、とミミが頷くのを見ながら、まじまじと剣を見つめる。

「でも凄いな。完璧に修復してあるじゃないか」

「はい、なんとか。鉱石も余っていたので」

修復、というのはかなり難しい技術だ。

一度作成した剣を修復するには、その剣にあつた温度の水と素材、そして何より高いスキルレベルが必要となる。特にアーベントルーラーのような強力な剣ならばなおさらだ。

そしてそれを難なく実行してしまえる、このミミという鍛冶師の腕は正に本物だ。

「ところで、カナメさんはどうしてここに……あ、刃研ぎですか？」
「そゆこと」

問われ、カナメは自分の置いた装備を指で指し示した。

「なるほど……これからどうするんです？」

「生憎、もう時間なんでね。俺はいったん落ちるよ。悪いな」

なるほどー、と頷くミミに、申し訳なく頭を下げた。

かくいう彼女も、昨日の飲み会にはきっちり参加していたのだ。

まあ速攻で酔い潰れて眠っていたわけだが、疲れていたのもきつと同じはずだ。

だというのに、恐らくシャワーを浴びる間もなくこうして作業に没頭している。

「私のことは気にしないでください」

こちらの心中を察したのか、ふつと優しく彼女は微笑んだ。

「正直、昨日みたいな凄いイベント、近くで見せてもらっただけで十分です」

彼女はパーティには参加してはいなかったが、モンスターの反応圏外から応援していたらしい。もっとも、割と距離があったのでその声は届かなかったが。

ただ、そういったギャラリィはあの日四十人以上はいたと思われ、結構な緊張を強いられたものだ。まあ、誰かがうつかり圏内に入ることにはなかったので、特別問題があるわけでもないが。

「あ、言い忘れてました。S級ユニーク討伐、おめでとうございませう」

「ああ、ありがとう。それも、ミミさんの作ってくれた武器のお陰さ」

「ふふ、そう言ってくれるだけで十分ですよ」

言葉通りの嬉しそうな顔で微笑むと、「それじゃあ、作業に戻りますね」と積まれた武器の山へ向かっていった。

それじゃ、と手を挙げようとして……ふと思いつく。

「あ、そうそう。ギガースの落とした素材、ミミさんに使ってもらう予定なんで」

これは昨日、ギガースへ挑む直前に全員で決めたことである。いっそのこと、何か強力な装備を作ってもらおう、と。

「ほっ、ほんとですかっ!？」

カナメの言葉に反応して、すさまじい勢いで振り向いたミミが、

星のような効果音を伴うかのごとく目を輝かせた。

「ああー、憧れのS級ユニーク……一体どんな武器が出来るんでしょう?」

刀ですかね、片手ですかね、と夢現状態で両手を組んで空を見上げる。

……ああそういえば、彼女の悪癖を忘れていた、と若干の後悔。はつきり言ってしまうば……いわゆる鍛冶バカ、なのだ。彼女に鍛冶を語らせると、一日あつたって足りやしない。

……まあ、別に困るわけでもないんだけどな。

そう思いつつ、「それじゃ」と巻きこまれる前にそそくさと退散した。

「やっぱりああいう時は、僕が前に出るべきなんですかね?」

……ログアウト後、飛び込むようにして風呂に入り、玄関のチャイムを鳴らして勝手に忍姉の家に上がりこんだ。

うーだと布団にくるまったままのスーパーニートを風呂に放り込み、適当かつ手軽に飯を作り、二人で食事。正直、なかなか親が帰ってこないのと、お隣のニートがいつも乞食だったせいもあり、飯の腕前だけは人に誇れるものになっていたりする。

そしてその後、再びのオーリオウル・オンラインへ。

ログインすると、既に大広間に全員が集まっていた。

修理を終えた武器を返却され、それらをまとめてインベントリに叩きこむと、大広間の一角にて、先日のギガース討伐についての反省会と相成った。

「うーん、どうだろ。正直、ヒーラーが二人じゃちょっと層薄いし

……」

ライの言葉に唸りながら答えると、俺の正面に腰を下ろした、紅色の髪をした少女……ユーリが片手を挙げた。

「私も同感。正直、サンちゃん一人じゃちよつと心許ないしねえ」
サンちゃん、というのは、この場にいらないパーティメンバーの一人、@サンクレア@である。さばさばとした銀髪のお姉さんで、ライと同じくヒール要員の一人である。

しかし一方、ライは彼女とは違い、前線のタンク役としても活躍できるだけの強靱さと冷静さを併せ持っていた。ヒールも出来るため、彼はそんじょそこの壁役よりもよっぽど硬い。

とはいえ、ライのヒール技術はギルド随一だ。有名ギルドのサブリーダーだけあって、ステータスだけでなくプレイヤースキルの超一流。正直、彼の支援がなければ、今回の闘いは切り抜けられなかっただろう。

「私も同感だ、ライ。正直、ジグと私で、S級ユニークもそれなりに壁できるようだしな」

ジグ、というのも、ここにいない四人のうちの一人だ。クラスはグランドガード、典型的な壁構成だ。タンクビルド

一方ユイは、タンクとアタッカーの中間、といったところか。避けつつも受け、受けつつも攻撃する。ライが後方の司令塔だとするなら、彼女は前線の司令塔だ。事実、彼女の指揮がなければ、前線はあっさりと瓦解していたに違いない。

「なるほど、確かに……。カナメさんのお陰で、アタッカー層も厚くなりましたからね」

「そうだな。この恩恵は大きいよ」

ライとリンに口々に賞賛され、むぐ、と言葉を詰まらせつつ、話題を別方向に修正するべく口を開いた。

「課題は魔法役じゃないかな。いくらユーリさんがいるっていつて

も、魔法役が二人じゃキツイでしょう。S級の物理耐性を考えたら、出来れば三人は欲しい」

今回の構成は、ずばり前線四人、回復二人、弓二人、魔法二人だ。バランスがとれてはいるが、実のところ弓と魔法の一人ずつは、周囲にわいてくる雑魚の掃除がメインであった。

ここはいつそ弓を一人削って、魔法を増やしてみても……いやいやむしろ、属性持ちの一ガンナー（SG）とか……などと考えていると。

「あらあ。それはつまり、私じゃ不満ってことお？」

にやりと怪しげな笑みを浮かべ、ユーリがテーブルに身を乗り出して、こちらへとにじり寄って来た。

「はいい？」

いや、違う、そういう意味では などと言いかけたところに。

スパアン、と小気味の良い音が炸裂して、ユーリがテーブルの上で蹲った。

「馬鹿なことをしてないで、真面目にやれ」

見ればその隣に座っていたリンが、いつの間に装着したのか片手にハリセンを持ち、青筋を浮かべていた。

対して叩かれた本人、ユーリは、ちえーと唇を突き出して、明後日の方を向いた。

「もー、リンったらまたそうやって妬いてー。女の嫉妬はミニクイよ？」

「な、なっ……！？」

冷やかすような言葉に、がたんつ、とその場で立ち上がり、真っ赤になっただけだと震えている。

「あら？ ごめんなさい、冗談だったんだけど……凶星だったりして？」

てへ、と笑みを浮かべるユーリに、わなわなと震えるリンはこめ

かみに青筋を浮かべ……そして、目にもとまらぬ早業で、インベントリを開く仕草をした。

「き……さ、まあ……」

リンの手の中から、ハリセンが無数の青い粒になって消え去ると、今度はその逆送りを見るように、その片手に剣が生成された。

「げ……マズ」

対する少女も早業だ。同じくインベントリを操作して杖を装着。そして、脱兎のごとく逃げ出した。

「待て、ユーリ！ 今日と言う今日こそは……！」

「いやーん、怖い怖い。カナメちゃん助けて」

またもや始まる追いかけっこに、カナメは、深い深いため息を吐いた。

(03) - 花火

反省会も、特別大きな反省がないまま終わり……まあもつとも、今回は大勝利だったので当然なんだろうが、ともあれ解散と相成った。

そして今、夜の七時。

未だに俺は、オーリオウル・オンライン の中にいた。

……まあ、何をしているのかと言うと。

「た~~~~まや~~~~!!」

要約すれば、花火だった。

打ち上げられた花火が、パラパラパラという効果音を伴って光の花を咲かせ、そしてもう一輪 その隣でまた花が咲く。

おおおおーっ、という歓声のもと、集められるだけ集められた暇人、もといプレイヤーたちが、上空を見上げている。

上空では、白く濁る円環の下、光の花がぱつと咲いた。

花火アイテム、というものがある。

こいつは、製造職の中でも最も趣味の色が強い『火薬職人』クラスによるものだ。まあ本来は爆弾なのだが、特別なスキルとアイテムがあればこれこの通り、リアルとまったく変わらない大きな花火も作れるのだ。

今回の花火大会は、ギルドの倉庫に眠っていたものと、新たにいくつかが買い込んだものを、まとめて打ちあげて花火大会にしよう、なんて話になったのだ。

ちなみに発案者はミミさんで、全員を集めて回ったのは、なぜか顔が広い俺と人当たりのいいライだ。そこに、夕方になってログインしてきたギルドの面々も集まり、割と結構な人数で花火大会と相成った。

花火大会が催されたここは、小高い丘のうえにある、一面の花畑だった。

周囲は見渡せる限りの絶景で、その中で打ちあげられる花火というのも、現実の日本では絶対に味わえないだろう感慨深いものだ。まあ根本的に、今リアルの季節は冬なわけだが。

そしてまた、上空に大きな花火が一輪。

あの下では今頃、ミミさんが花火アイテムをバンバン使って打ちあげているはずだ。

製造職を一通り網羅しているらしいミミさんは、なんでも花火アイテムをより派手に打ちあげるスキルも持っているらしい。とはいえさすがに申し訳なく、なんなら俺がやる、と買って出たのだが、曰く「これはこれで面白いし、一番近くで見れるから」とのことで、やんわりと断られてしまった。

相変わらず、あの人は職人の鑑だと思う。

「……何を考えているんだい？」

気遣わしげな声に、ふと横を振り向くと、そこにはいつの間にかリンが座っていた。

その表情は、どこか優しい。

ふわり、と花が舞って　不意に、わけもなくどきりとしてしまい、そっぽを向いた。

「ああ……いや。ミミさんは大変だろうなと」

「はは、確かに。でも実際、確かにあれはあれで楽しんでるんじゃないかな？」

「そうなのか？」

問い返すと、ああ、と頷いた。

「一応、ちょっと行ってみたんだがな。何人か職人クラスの人が集まっただけ……結構楽しそうだったよ、打ちあげるのも」

「そうか……」

そして、またひとつ打ちあげる音が鳴って、空に光の花が咲いた。それを二人でじっと見つめながら……不意に、リンが言った。

「その……だな。カナメ……」

「ん？」

言われて振り向くと、なぜかリンは顔を真っ赤にして、地面をじっと見つめていた。

「その……なんだ。お前はああいうが、今回は本当に感謝してる。と、特に、ジークが死んだとき、お前ひとりで三十秒もタゲを持ち続けてくれたろう？」

「ああ、あれか」

言われて、少し苦笑する。

「ありや正直、シノブ姉の一弱体毒（WP）がないと速攻死んでたけどね」

そう断言できるほど、あの時のシノブ姉の立ち回りは、完全に神懸かっていた。

「そつ、そうかもしれないが、私はあの時の、その、お前の貢献が大きかったと思う！ そ、そそそ、その、正直ちよつとかつ　う　かう？」

わけが分からず問い返すと、いつの間にかリンの表情は茹であがったタコのごとく真っ赤に染まっていた。毎回思うに、VRMMOのこういう感情表現エモーションは少々ばかり大げさな気がする。

ごほん、とリンは仕切り直すように大きく咳払いして。

「その、なんだ。少し話があるんだが　」

「あ、ギルドに入ってたのはパスな。いい加減ライを止めてくれよ……リーダーさん」

機先を制する形で、若干うんざりしつつ言った。実のところ、俺達を執拗に　と言うと表現が悪いが　ギルドの勧誘してくるのは誰よりライなのだ。正直、一週間で十回ほど言われたことがあり、

その時は「勘弁してくれ」と思ったものだ。まあ……それでいて嫌味にならないのがあいつなんだが。

リンは「分かった」と少し頷いて……同時に、「いや」と首を横に振る。

「いや、そう言う話じゃなくてだ……カナメ」
「ん？」

と 再び、空に打ちあがる花火が音。

その音が大きかったので、首をそちらに向けると ひたすら特大の花火が、空に一輪の花を咲かせていた。周囲から、再びの歓声上がる。

「その……カナメ。この後、少し、時間があるか……？」
周囲と同じように、それをぼけーっと見上げていたカナメの耳に、ふと届いた声。

視線を返すと、真っ赤に染まった顔のまま、彼女は真つすぐにこちらを見つめていた。しかし先ほどの声には、どこか不安と、緊張が混ざったような色があつて。

「いいんですか？ ユーリさん」

呼ばれて、優しい声に振り向くと、そこには金髪碧眼の少年ライリツヒが立っていた。

言葉の割に、少しも心配していそうな気がしない。まあもつともこの少年の笑みが崩れたところなど、戦闘中ぐらいしか見たことがないわけだが……。

「いいんですか、って何がよ」

ふん、と胸を張る。

まあ、問い返さなくても分かっているけど、と思いながら。

「カナメさんのことですよ……言わなくても分かるんじゃないです

か？」

「だから、カナメが、どうしたっていうのよ？」

正直、自分は、この少年が得意というわけではなかった。

実のところ、こいつが一番の曲者なんじゃないかと思う。いつそこかのギルドのスパイでした、とか言われてもまったく驚かない。しかし何より厄介なのが……恐らく、コイツはそんな自覚なんてまったくなくて。きつと、心の底からギルドの一員として、自分たちを仲間だと思っているだろうこと。

そして、何より私がコイツを苦手としてるのは

「……だって。リースさん、カナメさんのことが好きなんでしょう？」

こういう風に、人の心を勝手に読んでくるところとか。

二人の視線の先では、リンとカナメが何やら話している。

まあ声までは聞こえてこないが、リンが赤くなったり青くなったり慌てたりしているので、内容はお察しの通りだろう。

「……それこそ、良いも悪いもないでしょ」

再び、空に花火が打ちあがる。

それを見上げないまま、ほんの小さくため息を吐いて。

「リンは決めてたんでしょ。S級ユニーク倒したら、気持ち伝えるって」

こないだいい雰囲気、こんな綺麗な景色で……それに第一、リンが本当に心を決めたのなら。

私の出る幕なんて、本当にありはしない。

「大変ですね……大人って」

少年が言うや否や、インベントリーを高速で操作。右手に杖を出現させ、それでばかり　という効果音の割に割と強烈に　少年

の頭を殴打した。

もつとも、私なんかよりも数倍は硬いだろう少年のHPは、1ドットほどこしか削れなかったが。

「今度言ったらぶつ放すわよ」

杖を突きつけて言うのと、少年は「ははは」と小さく笑った。

実際に、大人という奴は大変だ。

いろんなものに見切りをつけて、いろんなものを諦めていく。毎日をただ生きるだけで、その先に何があるのかもよく分からない。むしろいつそ、子供時代の方が、もつというんなものが見えてたんじゃないだろうか。

大人になれば、立派になるのではなくて　ただ擦り切れて、自分の放っていただろう光が鈍くなっているだけなんだと気づいたときには、もう完全に手遅れだ。

まあとは言っても、私はそこまでオバサンじゃない。まだギリギリで二十代前半だし。

確かにこの小柄なキャラクターには合っていないかもしれないが……。

だけれど、この自分とは正反対のようなキャラクターのお陰で、私はこの世界を愛せたんだろうと思う。この世界を愛せたから、リンと出会えて、S・E・Lと出会えて、カナメと出会えて……こんなにも仲間に恵まれた。

それ以上、望むものが何かあるだろうか？

私はもう、諦めるのには慣れてしまった。だからせめて、若い彼らには、いろんなものを諦めて欲しくないのだ。

いつかリンの恋が、彼女自身を傷つけることがあったとしても……

……その時は私が癒してみせる。

それは大人だからじゃない。友達だから。親友として……そして仲間として。

これ以上の得難いものを、私は知らない。だからそれ以上なんて望まない。

……だから、良いも悪いもあるわけがないのだ。

(……でも、もし生まれ変わることがあるなら)

それは、本当にどうしようもない、密かな……絶対に自分の胸の裡にしまっておくべきだろう、そんな想い。

もし生まれ変わることがあつて。

そのとき、彼と私が、結構近い歳だったりして。ばったりと、学校が偶然一緒になつて。

(……馬鹿ね。少女か、私)

自分の、そんなひそやかな想いを……しかし、隣の少年は見透かしたように。

「僕は結構、ユーリさんって可愛いと思いますけどね」

まったくもって、調子のいいおべんちゃらだ。

次、同じこと言ったら、絶対ぶつとばす。

そんな想いを胸に抱きながら……少女の顔をした自分は、小さく笑った。

「だから、アンタは嫌いなものよ」

ただ、それを遠くから見詰めていた。私には、他に出来ることなんてなかったから。

「カナメ……」

名前を呼ぶ。今その少年は、少女と楽しそうに話している。

でもきつと、彼は気づいていない。隣に座る少女の気持ちに。

「カナメは……ニブチン、だから……」

だから、気づかない。

彼女の気持ちにも　そして、自分の思いにも。

蓮宮忍にとって、千堂要は弟分だった。

お互いに親が不在で、そしてたまたま家が隣で……気がつけばそういう構図で、いつの間にかそういう関係だった。本当の姉弟のように育ち、そして歩いてきた。

自分が苦しいときも、悲しいときも、嬉しいときも、ずっとそばにいてくれた。

自分が言いたいことも、すぐに分かってくれる。
それだけ　それだけ理解してくれているのに。
なのに、この気持ちには気づかない。

（なんでだろう？　もしかして……気づかないフリ？）

うつん、それはないだろう。彼は、そんなことが出来るほど器用じゃない。

だとしたら……そう。やっぱり、ただ鈍いだけ。

「カナメ……」

分かっている。

きっと、自分のこの気持は伝わらない。

彼は気づかず、そして私は、その一步を踏み出す勇気がない。

だから、この一步は永遠に埋まらない。

だけれど、きっと。リンは……あの子は、その一步を踏み越えるだろう。

その一步を彼女が踏み替えた時。自分たちはどうなる？　自分とカナメの関係は……何か変わってしまうのだろうか。

「……怖い」

怖い。それが怖い。ひたすらに怖い。

恋人でいてくれ、なんて言わない。ただ、自分の傍にいてくれる

だけでいい。ずっとずっと、自分の傍で、いつもみたいに笑ってくれば、それでいい。

けれど　そんな想いに、きっと彼は気づかない。

「そろそろ……卒業、なのかな」

彼から。そして、自分から。

互いに一人の人間として……彼に依存することなく、生きれるように。

思えば彼は、ずっとその手助けをしていてくれた気がする。

「ずっと……カナメに、甘えっぱなし」

彼も悪いんだ。甘やかされてしまうから、甘えてしまう他になくなる。そうに違いない。

だからきつと……彼女と付き合いだして、自分を甘やかせる余裕がなくなれば、自分はきつと自立できる。そうに違いない。

でも　でも。

「もし……生まれ変わったら……」

もしもこの世界が終わって。自分が死んで、カナメもまたいつか死んで。

そして来世　生まれ変わることがあるのなら。

自分とカナメは、何か、今とは違う関係を築けるだろうか？

姉弟のような二人ではなくて……踏み出せないこの一步を、踏み出せる関係に変われることが……あるだろうか？

(……馬鹿な……妄想)

そう、それは妄想だ。ただの妄想。

生まれかわり

転生なんてものはありえない。もしあったとして、再び出逢えることがあるのなら、それは奇蹟だろう。

(私と、カナメが恋人とか……変)

ああまったく変だ。想像がつかない。そんな未来、まったくもって想像がつかない。だから　。

(ずっと、想うだけなら……いいよね)

願わくば、奇蹟を。

しかし奇蹟なくとも……彼を想い続けることだけは。この胸の内側にある優しい想いを、ずっと抱えて生きていくことだけは、出来るから。

「カナメ……」

どうか、幸せになつて。

これだけは、違いなく　蓮宮忍にとって、間違いなく本物の願いだった。

かくして、花火大会は続いていく。

いろんな人の、いろんな想いを乗せて……それを空に打ちあげるように。

八時三十分。

公園のブランコに腰かけたまま、待ち人に片手を挙げた。

「よっ」

息が白く染まる　季節は冬。

あの後、「時間はあるか」と聞かれて了承した俺は、リアルの、リンの家の近くにある公園で待ち合わせすることになった。

まあその理由は単純で、俺はスクーターがあるが、彼女は徒歩で来るしかないからだ。

実際、それよりも十分ほど早く到着した俺は、ブランコなどを漕ぎながら、彼女の到着を待ち　そしてきっかり三十分。相変わらずの完璧さで、少女は姿を現した。

もっとも、俺たちはもともリアルでの知り合い、というわけで

はない。

しかし、S・E・Lの中でも特に付き合いのあるメンツ　リン、ユーリさん、ライ、ミミさんの四人とは、リアルで何度かオフ会を開いたこともある。

まあ最初は、ユーリさんのキャリアウーマンの出で立ちにびっくりしたり、リンがゲームの中そのままの外見だったことに驚いたりと、大変だった。

ちなみ、そのままというのは服装の話ではなく、顔の出で立ちの話である。

オーリオウル・オンライン　において、アバターの顔は自動的に決定される。

といっても無茶苦茶な顔になったりすることはあまりない。なんでも、自分の深層意識を読み取って、そこから生成されるらしい。生成はやり直せるが、そこまで大幅に変化することもない。

そしてそれゆえに、あのゲームの中で、二つとして同じ顔は存在しないし、性別を変えてプレイすることも不可能だ。まあ声は変化しないから、顔だけ変えてもすぐ分かるだろうが。

とはいえ……本人の顔がそのままアバターになってしまう例は、間違いなく希少だろう。むしろリン以外には見たことも聞いたこともない。

まあ本人はそれなりに気にいっていて、曰く「違和感がなくてやりやすい」らしい。

そしてライ曰く、「リーダーは根が正直すぎるから、それが出たんだと思いますよ」とのこと……実のところ、俺もこの説を推している。

まあ、ネットゲームの中でも話題になるほどの美人なので、当然、こちらで見てもその美しさはひとつとして損なわれていない。むしろ、リアルの方がどちらかと言えば魅力的に見える。

まあそれも当然だろう。

次世代VRMMOと謳われる オーリオウル・オンライン でさえ、表情の完全再現は果たせていない。リアルでは分かるシノブ姉の表情が、ゲーム内ではろくろく分からないように。

いくらリアルとはいっても、やはりゲームなのだ。リアルの彼女を見ると、毎回そんな想いに捕われてしまう。

「とりあえず座れよ」

「あ、ああ……」

隣のブランコを指し示され、どこかいつもより綺麗な気がするリングが、静かに腰を下ろした。ギィ、とわずかな音を立てると同時、口を開く。

「すまないな……。待たせたか？」

「いや、大して待つてないよ。思ったより車が少なくて早く着いただけさ」

こちらの言葉に、「そうか……」とだけ答えて、その後には静寂が満ちる。

お互いに無言のまま……俺は空の星空を見上げ、リンは地面をじつと見つめていた。まあ別にそのままでもこれといって文句はないんだが、静寂がなんとなく痛々しかったので、口を開く。

「……で、どうしたんだ？ 急に、時間あるかって」

「あ、ああ……」

「ギルド じゃないって言ったか。じゃああれかな。次の狩りの話？ 誘ってくれるなら行くけど、回復アイテムがあんまり心許ないから……」

「いつ、いや……っ！ 違う。その……違うんだ」

思いつく話をつらつらと重ねていくと、ぱっとリンが顔を上げて否定した。

じゃあ何の話なんだろう……分からず首を傾げる俺に、リンは、

すつはあと何度かの深呼吸を経て、もう一度俺に振り向いた。

暗がりによく分らないが　なぜか、ここはゲームの中でもないのに、その顔が赤く染まっている気がする。

「その……ずっと決めてたんだ。S級のユニークを倒したら……つて」

「？」

途切れ途切れの言葉と共に、リンが立ちあがる。

俺もそれを追うように、ブランコから立ちあがって……そして、振り向いたリンと、真正面から視線が合った。

「……私は。私は、ずっと……」

そして、それはあまりにも唐突だった。

世界が白く染まっていく。

白昼夢、ではない。ただ世界が遠ざかって　遠ざかっていく。

「私は、ずっと……君のことが　」

その中で、ただリンの声だけが聞こえて。

そして、それすらも遠ざかって……。

「君のことが……」

その言葉の終わりを聞けないままに。

世界は……ただ白く。

ただ白く　塗りつぶされていった。

(03) - 花火(後書き)

……そして、ついに本編へ。

ちよっとプロローグが長くなってしまいました。

暇な時に更新するので不定期ですが、またまた暇な時に読んでもらえればと思います。

バレット・ブルーよりは更新が早い……かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3702y/>

悠久のフォルトゥーナ

2011年11月9日19時11分発行